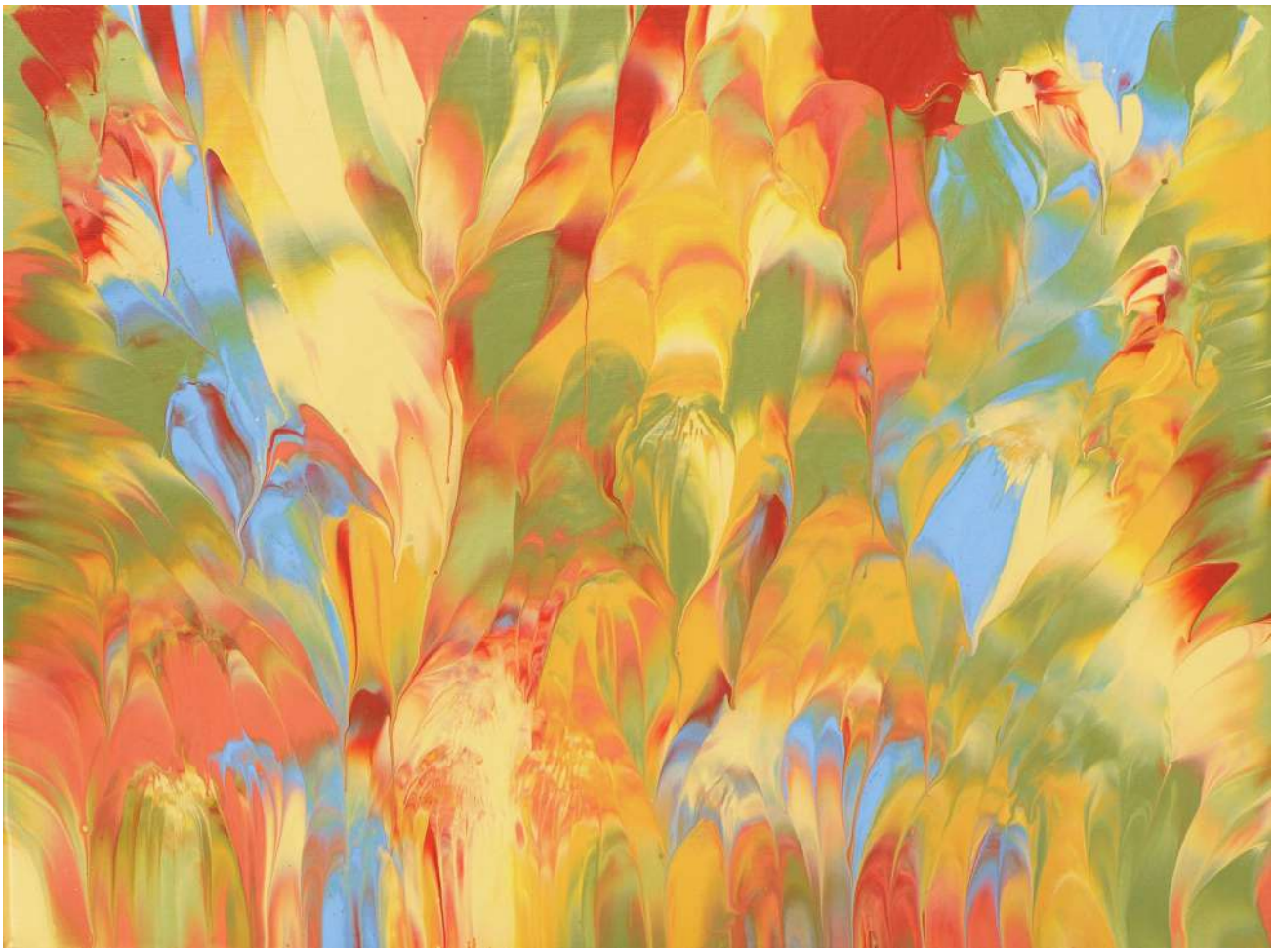
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 133

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

2641.【アムステルダム滞在記】漂流の旅の終わりに向かって

2642.【アムステルダム滞在記】音色の探究に向けて

2643.【アムステルダム滞在記】変容の過渡期の中で

2644.【アムステルダム滞在記】幻滅

2645. 存在の変容と関心の変容

2646. フローニンゲンでの新たな生活

2647. 涼しげな初夏のフローニンゲン

2648. オディロン・ルドンの作品と魂の安住池

2649. 絶えざる自己反省と実践

2650. 新たな歩み

2651. クレラー・ミュラー美術館への再訪計画：オディロン・ルドンの特別企画

2652. 安住の地を求めて

2653.「型」について

2654. 空という象徴

2655. 使い込まれた書籍

2656.『新世界より』とトロムソでのオーロラ観察

2657. 初夏の黄昏時より

2658. 緩やかな時間の中で

2659. オーロラ観測クルーズへの乗船計画

2660. 芸術教育に関する探究

2641.【アムステルダム滞在記】漂流の旅の終わりに向かって

気づかないうちに今日から六月に入った。時の流れは速く、今月の中旬に修士論文を提出すれば、三つ目の修士過程を無事に修了することになる。論文の評価は七月中になると思うが、論文さえ提出できればそこからはもう完全に自分の探究だけに全ての時間を充てることができる。そこから毎日、自分が読みたい書物をとことん読み、とことん何かを考えそれを文章にし、とことん作曲実践に打ち込みたいと思う。

以前仮に今後学術研究を進めていくのであれば、博士号を少なくとも三つほど取得しようと思っていることを書き留めていたように思う。だが最近は、学術機関とそれを取り巻く文化と制度に少々失望しており、博士号を取得するかどうかも改めて考え直している。

この一年間は再度自分の関心を問い直すような年になるだろう。一つ言えるのは、これまで取得した二つの修士号のように、理系的(科学的)な博士号にはほぼ関心が無くなってしまった。また一つ夢から覚めたような感覚だ。仮に博士号を取得するのであれば、思想関係のものになるだろう。しかも領域は美学や芸術が有力な候補として挙がっており、それらの領域と人間発達を関係づけるようなテーマであれば博士論文を書こうという意欲が湧いてくる。

ただしそれも今はまだそれほど強いものではない。昨日から非常に楽しみにしていた学会に参加している最中に言うのも少々忍びないが、学術的な世界にいることが徐々に窮屈なものに感じられ始めている。もう本音を述べると、結局自分は学術研究よりも芸術活動に従事したいようなのだ。一切の金銭報酬を求めず、ただ作りに作るだけの日々を送りたい。極端な話、作ったものが世に出るのは自分の人生が閉じてからでもいいと思っている。ただ作るということの中にだけ無上の喜びがある。

ここ数年以内に諸々の事柄を清算するというのは、創造活動だけに従事できるような生活を実現させるための準備をするという意味であり、それは水面下で着実に進んでいる。一般的な意味での引退は遅くとも30代の半ばまでに行い、創造活動における引退は一生しない。金銭報酬を得るような仕事からできるだけ早く手を引きたいと思う。ただ作るだけでいい。ただ作るだけの生活だけが自分を人間らしくしてくれる。

自分が人間であることを確認し、人間らしく生きることを実感させてくれるのは創造活動だけになった。それ以外のことは本当に望まない。少なくとも自分にとっては全く不要なものになってしまった。

夢から覚めるとまた一つの夢から覚める。今回剥がれ落ちた夢は随分と根の深いものだったように思う。無数の階層を持つ夢から徐々に目覚めていくプロセス。それが人間の発達過程における真髄なのだと改めて実感する。

この地球上のどこかで人知れず生活を営み、日記の執筆と作曲だけを毎日淡々と続けていくだけの生活。自然を感じられる場所で文章を書くことと曲を作ること以外に何を望むというのだろうか。人間として生きていく上で生涯欲望を持ち続けることが宿命づけられているのであれば、そうした生活を送る欲望だけは許容して欲しいと思う。あとは他に望むことなど一切ないのだから。

今年一年は特に欧州各地を旅行し、今後数年間は船旅を含めて世界の様々な場所を訪れたいと思う。それはどこか自分の安住の地を探し求めるような漂流の旅のように思える。人知れず生活を送り、日々絶えず創造活動だけに従事することを可能にするような場所はこの世界のどこにあるのだろうか。まずは自分の内側で確固たる場所を見つけ、それにふさわしい外側の場所を必ず見つけたいと思う。地球上のどこかにそうした場所があってほしい。アムステルダム:2018/6/1(金)08:09

2642.【アムステルダム滞在記】音色の探究に向けて

先ほど昼食を摂り終えて、今はまた日記を書き留めておきたいという気持ちになった。結局今日は自分の学会発表の直前までホテルでゆっくりすることにした。昼食前に、発表内容に関する予行練習を何度か行った。発表時間は15分強であり、時間としては非常に短いのだが、準備は入念に行った。もう内容に関しては自然と口から出てくるような状態になっているため問題ないだろう。ホテルを出発する直前にもう一度最後の発表練習を行っておきたい。

午前中は随分とゴッホの画集を眺めていた。購入した五冊のうち、昨日に一冊読み終わり、今日の午前中に三冊を読み終えた。明日には最後の一冊を読み進めたいと思う。今回アムステルダムを訪問して最も幸運なことは学会に参加できたことではなく、ゴッホがもう一度自分の内側に深く強く入り込んできたことだった。ゴッホの存在は私にとってかけがえのないものであり、創造活動上においてゴッホから様々なことを私は今後も学び続けるだろう。

ゴッホのある画集の中に、ゴッホから影響を受けた画家の作品が収録されていた。中でも私は、オディロン・ルドンというフランスの画家に大変関心を持った。彼の幻想的な作風に強く惹かれるものがあった。作品というのは本当に面白いもので、作り手がどのような種類と質の思想を持っているのかを一瞬にして物語る。

ルドンの持っている思想に私は一瞬にして虜になった。今後は少しずつルドンの作品を意識的に鑑賞したいと思う。いつか日本に一時帰国した際には、ルドンの作品が多数所蔵されているという岐阜県美術館に是非とも足を運びたい。

昨日の日記で書き留めたように、今後は学術機関に所属することに対して慎重になろうと思う。できるだけそうした機関に所属しないのが賢明かもしれない。今の私にはどうも、そうした機関に所属することが、自分が生み出そうと思うものを生み出すことの邪魔になるように思える。

明日はまだ学会期間中だが、明日の朝から早朝に作曲を行うことを習慣にしたい。これは以前にも何度も書き留めた考えではあるが、どうしてもこれまでの生活状況では午後に作曲をすることしかできなかった。とにかく読書をするよりもまずは曲を作る。曲を作ることを最優先にした生活を実現させていく。

今日から六月に入り、修士論文の提出が間近に迫ってきた。学会から戻った翌日の日曜日と月曜日の二日間に集中して最後の詰めの執筆を行う。それをもって論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授に最後のレビューをお願いする。それ以降の修正は本当に最低限のものにする。

ゴッホが花の絵を無数に描くことによって色彩の研究をしていったように、自分も音色の研究をしていこうと思う。とりわけ、ハーモニーに対する理解を深めていくことが大切だ。後期のゴッホのように、色彩豊かな曲を作るにはどうしたいいのかと考える自分がいる。ゴッホは、例えば青とオレンジ、赤と緑、黄と紫が生み出す色彩効果を熱心に研究したことが画集の解説文からわかった。

そこから私は、やはりそれぞれの色を音として表現するにはどうしたらいいのか、という問いを立てて探究を進めていくことが大切に思われた。まずは参考として、それらの色を音色として見事に表現している印象主義の作曲家の作品に範を求めたい。それに加えて、先日に読み終えたシュタイナーの音楽理論に関する書籍と色彩に関する書籍をもう一度読み返す。いや何度も繰り返して読

© YOHEI KATO 2018

み込みたいと思う。そうした探究と並行して、今後少しずつ身の回りのありとあらゆる対象から喚起される内的感覚を曲にしていく実践を意識的に行う。それは言い換えれば、「音楽のデッサン」の修練を積んでいくことを意味する。

今日はこれから仮眠を取り、一曲ほどバルトークの曲を参考にして曲を作り、学会の発表内容を再度確認してからホテルを出発する。アムステルダム:2018/6/1(金)14:25

2643.【アムステルダム滞在記】変容の過渡期の中で

アムステルダムでの滞在も今日で最後となる。滞在の最終日は国際ジャン・ピアジェ学会が最後の日であるということを示している。今回、私はこの学会に参加することによって諸々のことを学んだ。もちろん、知識の面で非常に有益な学びがあったのは確かだが、それ以上に大きな学びは、学術機関に所属して研究をしないようにすることの自分にとっての意義だったように思う。

昨夜も就寝前に少しばかりあれこれと考えていたが、大学の教授になることは避けようと思う。学術機関に所属していては自分が真に打ち込みたいと思っていることに打ち込むことなどできないことが明白なものになった。

今回の学会に参加することによって得られたことは、学術研究を行うことへの失望だったように思う。この失望感が今の私には必要だったようだ。これまでの人生を通じて、学術研究そして学術機関に所属することに対して何度か不信感を抱くことがあったが、今回のものは同種でありながらも質的には異なる感覚だったように思う。

本来今日も学会があるのだが、もう今日の学会に参加する気力はない。今回の学会は、これまで私が関心を持ち続けていた発達科学、しかも複雑性科学の観点から発達現象を扱う最大の学会であるはずなのだが、もう関心がそこにはないことを知る。発達科学と複雑性科学への関心はもう薄れてしまっている。ここに人生が次のフェーズに向かっていることを見て取ることができる。

自分の探究活動が新たなものに変容する予感をここに感じる。もちろん、今後も多少なりとも発達科学と複雑性科学に触れることはあるだろうが、それを主な探究活動にはしない。今回の学会に参

加した意義は、自分の探究活動を全く別のものに変えていくきっかけを提供してくれたことにあったと言えるだろう。人生の一つの章が終わり、別の新たな章が始まる。

今日は学会に参加しないことにしたので、午前中にアムステルダムを出発する。ホテルをチェックアウトするのは九時過ぎにしようと思う。これから一階のレストランに降りていき、水とコーヒーを取ってくる。チェックアウトの時間までは過去の日記を編集することや作曲実践を行いたい。

三日前に訪れたヴァン・ゴッホ美術館で購入した五冊の文献をすでに全て読み終えてしまった。ゴッホの生涯、そしてゴッホの作品には強く私を惹きつけるものがある。ゴッホは画家になる前に、異常なほど熱心に神学を学び、牧師になろうとしていた。しかしその道を諦め、画家になることを決心した。科学を熱心に学んだ今の自分が科学に対して失望をし、自らの創造活動だけに従事しようとしている今の姿をゴッホの生き様についつい重ねてしまう。

人間の発達を本格的に探究し始めてどれくらいの期間が過ぎただろうか。よくよく考えればまだ七年ほどしか経っていない。今ここで変容の節目がやってきたことに驚く。「あぁ、これが変容の過渡期か」ということを身をもって体験している自分が今この瞬間にいることに驚く。発達現象を科学的な観点から探究することからはしばらく身を引きたいと思う。もしかしたらもう二度と科学的な探究をしないかもしれない。

それは一人の探究者として完全に新たなフェーズに移ったことの表れであり、歓迎すべきものだろう。フェーズが移行することに伴うこのなんとも言えない喪失感を書き留めておく。思想と芸術だけが目の前に残った。やはり自分には初めからそれらしかなかったのかもしれない。

逆に言えば、最初からそれらだけが自分の内側にあり続けていてくれていたのだ。それに気づかなかったのは私自身であった。思想と芸術。今日からまた目的地のない目的地に向かってゆっくりと歩みを進めていこうと思う。今日のアムステルダムの朝は妙に静かだ。アムステルダム：2018/6/2（土）06:45

2644.【アムステルダム滞在記】幻滅

アムステルダムで迎える土曜日の朝。空は曇っており、気温は低い。今日のアムステルダムは一日中曇りのようだ。フローニンゲンの天気も確認してみると、ほぼ同様であった。気温は20度ほとであり、少々肌寒く、長袖で外出をする必要がある。ホテルのチェックアウトまでまだ時間があるので少しばかり文章を書き留めておく。

今後の探究活動の方向性についてはほぼ明確になった。科学的な論文を書くことにはもう関心を失ってしまった。科学的な論文を読み、その知見を自分の日々や仕事に活かしていくことはあったとしても、自ら率先して科学的な論文を執筆することはもうないかもしれない。

これからは探究事項を大きく変えていく。フローニンゲンで過ごす二年目の最後のこの時期に本格的に探究を始めた美学及び芸術教育に探究項目を変えていく。少なくとも今年一年は学術機関に所属せず、自らの関心に従うままにそれらの探究を行っていく。

学会初日のポスターセッションで非常に面白い研究をしているブラジル人教授と出会った。その女性教授は、ヴィゴツキーとシュタイナーの思想を比較する研究を行っていた。その教授はとても陽気な方であり、彼女のポスタープレゼンテーションと学会初日のポール・ヴァン・ギアート教授のプレゼンテーションだけが今回私の心を動かした。この教授は主にポルトガル語で論文を執筆しているそうだが、英語の論文もあるようであり、ポスターの引用欄に掲載してあった英語の論文を早速読みたいと思う。

今私はシュタイナーの芸術教育に対する考え方と実践方法に強い関心を持っている。また、色彩と音楽に対するシュタイナーの思想にも注目をしている。

科学的な論文を執筆することはもうないかもしれないが、思想的な論文を書く可能性はまだ残されている。もしかすると、今後明確な思想的探究事項が定まったら博士課程に進学をするかもしれない。それまでは博士課程に行かないようにする。せっかく四年以上の時間を博士課程で過ごすのであるから、明確な主題を持たぬまま無為な時間を過ごしたくはない。

今年一年は創造活動に明け暮れる中で、思想的なものを自分の関心に赴くままに探究していこうと思う。その過程の中で、自分が博士課程に進んでもいいと思えるほどの探究項目の輪郭が徐々に明らかになってくるかもしれない。

今日は学会に参加せず、そのままフローニンゲンに帰る。今回の学会の中で参加した一つの分科会でのやり取りが印象に残っている。その分科会は、今回の学会ではおそらく唯一、哲学者だけが発表を担当しており、内容としてピアジェの哲学思想に踏み込んでいくものだった。その分科会の中で、毎回発表者に対して激しい攻撃をする70歳を過ぎた学者がいた。彼の英語から察するに、英語圏の人間ではなさそうだった。

私は初めて思想的な激しい対決をそこで見たように思う。正確には、発表者の教授は二人とも成熟しており、非常に冷静だったのだが、聴衆の一人であったその年老いた学者がなぜだかわからないが口調を荒げて質問や意見を何度も述べていた。その初老の学者を見ながら私はとても幼稚な学者もいるものだと思ったし、おそらく周りの人たちもそのように思っていただろう。人格が未熟な学者がいることは当然だろうが、その年でそのような成熟しか遂げていない者が本当に存在しているのだということを初めて目撃したように思う。

その初老の学者はピアジェの思想に対する思い入れが人一倍強いのかもしれない。彼の口調を観察していると、何か自分が信仰する宗教が否定されたかのような怒りの念を持っているように思えた。 発表を担当した二人の教授がとても冷静であったことは素晴らしいと思う。思想的な発表をする際には、もしかしたらこうしたことが付き物なのかもしれない。

そのため、発表を担当した経験豊富な二人の教授はこうしたことに慣れていたのだろう。しかし今思い出してみても、その場でのやり取りは私を幻滅させるには十分であった。アムステルダム:2018/6/2(土)07:39

2645. 存在の変容と関心の変容

曇った空の下、列車が着実にフローニンゲンに向かって進んで行く。先ほどユトレヒト駅を出発し、列車は順調にフローニンゲンに向かっている。アムステルダムからユトレヒトまでの列車の中、そして今も過去の日記の編集に時間を充てている。編集が少し落ち着いたので、今列車の二階席から

窓の外の景色をぼんやりと眺めている。オランダの景色は本当にのどかだ。今日は気温が低く、あいにくの曇り空だ。

列車の中にいるのは名前の知らぬ乗客たちである。窓の外を眺めると、名前の知らぬ無数の植物たちの顔が見える。フローニンゲンに到着するのはあと一時間ほどだろう。フローニンゲン駅に到着したら、帰りに行きつけのチーズ屋に立ち寄り、チーズとナッツ類を購入しようと思う。

その後自宅に到着したら、その足で近所のスーパーに行き、一週間分のカレーの材料を調達する。夕方からカレーを作り、その他の時間は作曲実践と作曲理論の学習に時間を充てたいと思う。フローニンゲンに戻ってきてからの生活はまた新たなものになるだろうという確信がある。人生の新たなフェーズがようやく今始まろうとしている。

午後から作曲実践に多くの時間を充てていこうと思うが、六月末にロンドンで行われる学会への参加をキャンセルすることを忘れないようにしたい。六月末の学会でも発表する機会を得ることができたが、それは論文セクションではなく、ポスターセクションであり、キャンセルをしても全く問題はないだろう。

学会に参加することはもう完全に時間の無駄だと思うようになった。とはいえ、六月末にロンドンを訪れることは変更しない。学会には参加しないが、その代わりに大英博物館や音楽関係の博物館を訪れる。もう科学的な研究をする意欲はほとんどないのであるから学会に参加する意味はなく、今日の夜に学会のキャンセルを済ませる。

自分の関心が科学的な研究をすることに向かわなくなったこと。それはとても幸運なことである。自分の内面世界が一つまた深まったことをここに見てとる。内面の変容と関心の変容は同時に起こる。しかも内面の変容が急激なものであればあるほど、関心もまた急激に変容するのだと思う。

欧州での三年目の生活が新たに始まるというのはこのような意味を持っていたのだということを今初めて知る。ズヴォレの駅で列車を乗り換え、フローニンゲンまであと一時間ほどとなった。ズヴォレ近郊：2018/6/2（土）11:48

2646. フローニンゲンでの新たな生活

アムステルダムからフローニンゲンに戻ってきて一夜が明けた。昨日は早めにフローニンゲンに戻ってきて本当に良かったと思う。本来であれば昨日は、国際ジャン・ピアジェ学会の最終日であったが、もう学会に参加するような気力がなかったため、ホテルで少しゆっくりしてから九時過ぎにホテルを出発した。昨日は早くフローニンゲンに戻ってくることができたため、一週間分のカレーを作ることができた。

これでまたすぐに普段通りの生活に戻ることができる。それにしても自分の関心が、発達現象を科学的に研究していくことにないというのは大きな転換であった。科学的な手法を用いて明らかになる一つ一つの発達現象については依然として関心があるが、そうした研究を自分で行うことにはもう関心がない。そうした研究に従事することに伴う心の空疎感に耐えられなくなってきたと言える。

仮に今後科学的な研究を再び行うことを決意した際には、外から内へではなく、内から外への手法を採用することになるだろう。外から内に向かう方法で発達現象を研究していても何の喜びも充実感もない。そこには欠乏感と喪失感しか漂わない。

昨日はさっそく夕方に、今月末にロンドンで行われる国際学習科学学会の参加のキャンセルをメールで依頼した。まだそのメールへの返信はないが、無事にキャンセルができればと思う。学会に参加するのではなく、その代わりにロンドンへは博物館や美術館を巡りに訪問しようと思う。ロンドンには随分と多くの素晴らしい博物館や美術館があることに驚く。

調べてみると、それらの多くは無料で入館できるらしい。ロンドンに何日滞在するかは決めていないが、滞在期間中はどこかしらの博物館や美術館で多くの時間を過ごそうと思う。

フローニンゲンに戻ってきてからの初日が始まった。今日のフローニンゲンの空は曇っていて、とても涼しい。冷たい風がサラサラと流れている。小鳥たちの鳴き声に耳を傾けながら、今朝方の夢について思い出していた。今朝方の夢は、何やら小中高を通じて仲の良かった親友三人とワインのテイスティングをしているような内容だった。

私はもうアルコールを摂取することはないので、その場ではテイスティングをすることなく、親友たちと話をすることを楽しんでいた。その後に見た夢はとても印象に残るようなものだったが、起床してからすぐにその内容を忘れてしまった。いずれにせよ、フローニンゲンに戻ってたその日に印象的な夢を見ていたことだけを書き留めておきたい。フローニンゲンでの落ち着いた日々がまた始まったことを嬉しく思う。フローニンゲン：2018/6/3（日）06:59

2647. 涼しげな初夏のフローニンゲン

早朝のフローニンゲンはとても涼しい。幾分寒いぐらいである。アムステルダムに滞在するためにフローニンゲンを離れたのは五日ほど前のことであるが、その前の週は暑い日が続いていた。しかし今日からはまた涼しい日々が続くようだ。フローニンゲンの初夏は本当に涼しく、その涼しさは真夏においてもほとんど変わらない。

今日は昼食前あたりから論文の執筆に取り掛かりたいと思う。修士論文もいよいよ大詰めであり、前回のミヒャエル・ツショル教授とのミーティングの内容をもとに論文の加筆修正を行っていく。今週の半ばにツショル教授に送る論文が最後のドラフトになるだろう。そこから論文の提出までまだ時間があるので、緩やかに執筆の詰めを行っていく予定だ。

今日の執筆では、先行研究の文献調査に関する記述をより分厚いものにしていく。各文献を掘り下げることとそれらを関連付けることによって記述の内容を濃いものにしていく。先日のミーティングを通じて、まさにその方向性を採用することに決定した。何をどのように記述していくかについてはすでに見通しがついているため、もう一度核になる文献を読み直し、必要であれば新たな文献を付け加えたいと思う。この作業は今日と明日にかけて集中的に行っていく。昨日までの学会に参加することによって、今後は科学的な研究から身を引くつもりでいるので、この論文をある意味最後の論文として責任を持って執筆する。

昨日は夕方に音楽理論に関する書籍を改めて読んだ。今日から再び音楽理論および作曲理論に関する書籍を旺盛に読み進めていく。ここ最近内的感覚をデッサンする習慣が続いていたためか、これから書籍を読んでいく際には文章のイメージをより積極的に図として表現していこうと思った。あるいは文章を読みながら喚起された感覚すらもデッサンとして余白に形として残しておいた方が

良いかもしれないと思うに至った。それは書籍を読みながら現在使っている三色ペンで描いてもいいし、あるいはデッサンで用いている色鉛筆を活用してもいい。

色鉛筆の方が視覚的に優れていると判断すれば色鉛筆を使うようにする。とにかくこれからは文字情報を文字情報としてだけで認識しないようにする。とにかく様々な感覚を刺激するような形で読書を進めていく。その一つの手段はまさに上述したように、イメージ図を豊富に挿入していくことだろう。

今日は、昨日に全体を改めて一読した音楽理論に関する基礎的な専門書を再度読み返す。今度は昨日と異なり、一つ一つの項目を比較的時間をかけて読んでいこうと思う。ただし、すでに定着した知識項目については飛ばし、まだ理解が浅い部分に絞って読んでいく。こうした形で読み進めていけば、近日中に再びこの書籍を読み終えることができるだろう。

書籍を読む際のポイントは繰り返しであり、とりわけ繰り返す方法にあると思う。どのようにしてどれだけ繰り返すかが書籍の内容の定着には不可欠である。昨夜から読み進めたハーモニーに関する分厚い書籍に関しても、一読目は全体の雰囲気を掴むように簡単に読み通し、二読目から少しずつ一つ一つの項目の内容の細部に入っていく。現在の自分の関心領域である音楽理論・作曲理論、美学、意識の形而上学に関する書籍はとにかく繰り返し読んでいく中で理解を深めていくことにしたい。フローニンゲン:2018/6/3(日)07:23

2648. オディロン・ルドンの作品と魂の安住池

早朝、ゴッホから影響を受けたフランス人の画家オディロン・ルドン(1840-1916)の作品をぼんやりと眺めていた。アムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館で購入した五冊の画集の中のどこかにルドンの作品があり、それは私を強く惹きつけた。有り体に言えば、ルドンの作品は実に幻想的であり、そうした幻想性の中の何かが自分を強く惹きつけている。その何かがわからなく、それを探しているような最中に今の自分はいる。

ルドンの絵の中に、自分にとって極めて大切なものが表現されているに違いない。いつか日本に帰る日がやってくれば、ルドンの作品が多く所蔵されている岐阜県美術館に足を運びたい。

ここ数日間、今後の自分の生活拠点について考える瞬間がたびたび訪れた。安住の地というものがなかなか見つからない。この世界において一体どこに自分は落ち着けばいいのだろうか。自分の魂の持つ遍歴性を考えれば、確かにこれからも長く様々な場所で生活をしていくことになるだろう。同時に、この世界には必ずどこかに遍歴を望む自分の魂ですらも納得できる唯一の場所があるに違いない。それがどこなのだろうか。そうした場所の候補をまずは探していく必要がある。

この世界にはまだまだ自分にとって知らない場所がありすぎる。それは日本においても同じだ。以前より私は北海道に関心を持っている。いつか北海道に足を運び、その地を自分の目で確かめたい。

幼少時代から重ねてきた数多くの旅で訪れた場所について思い出す作業をしていかなければならない。今、何かを必死で思い出そうとしている自分がいる。旅先で見たものや感じたものを思い出せる範囲で思い出していく。そこに魂の安住地に関するヒントが隠されているように思うのだ。

仮にいつか日本で生活をする日がやってくるのであれば、北海道を一つの候補として、その他にどのような候補があるかを探す必要がある。とにかく自然が豊かな場所であることと人が少ないことが重要な要件である。この歳になって改めて思うのは、生活拠点の選択に関しては両親の感性から多大な影響を受けているということだ。欧州で生活を始めて以降、幼少期に過ごした場所がどれほど今の自分の人格形成に影響を与えていたかを知る。

山口県で幼少時代を過ごせたことは、私にとって何にも代えがたい財産であり、東京に住まないことを決心した両親の英断には本当に感謝をしている。何かが有るようでいて何も無いのが東京だ。自分が生誕した場所である東京に対して、そしてこの人生の三分の一を過ごしてきた東京に対して言うのは忍びないが、東京で再度生活をするという馬鹿なことだけはしないようにしたい。

東京とは思えないような、人が少なく、自然が豊かな場所も東京には存在している可能性はあるため、いつかそれを確認しに東京に行く必要があるかもしれない。ただし、今は本当に気が重い。東京に住むことを考えるだけでも気が滅入ってしまう。

気づけば昼食まであと一時間ほどとなった。結局今日は午前中に論文の加筆修正をするのではなく、午後の仮眠を終えてから夕食までの時間にそれを行うことにした。これから昼食までの時間を使っ

© YOHEI KATO 2018

て、モーツァルトに範を求めて一曲作る。昼食後すぐにもう一曲作る。その際にもモーツァルトの曲を参考にしようと思う。

昼食後に一曲完成した頃にちょうど仮眠の時間がやってくるだろう。いつものように20分ほど仮眠を取り、そこから論文の加筆修正に取り掛かる。夕食後は音楽理論と作曲理論の学習に時間を充てたいと思う。日曜日はそのように進行していき、明日からの月曜日に向かっていく。フローニンゲン：2018/6/3（日）11:02

2649. 絶えざる自己反省と実践

今日は午前中に一曲、昼食後にもう一曲作った。それらの曲はどちらも共にモーツァルトが17歳の時に作曲したものだ。これまではモーツァルトがより幼少期の頃の曲に範を求めていた。それらの曲との比較で言うと、やはり今日参考にした二曲の方が洗練されている。

明日は早朝に再度モーツァルトに範を求め、午後からはバッハの曲を参考にしたい。一日に作曲実践を二度行うというリズムをなんとか確立していきたいと思う。

午後の作曲を終え、仮眠を取ってから、論文の加筆修正を行った。およそ三時間ほど加筆修正に集中することができ、目標にしていた半分の作業が終わった。しばらく文章を寝かせ、再度読んでみると、自分の文章の穴に気づくことができ、そうした穴を補強する形で進めた今日の加筆修正は極めて納得のいくものであった。明日もまた今日と同じ時間帯から加筆修正を行っていきたいと思う。

今日は昼食前にデッサンで用いている色鉛筆を自分で削った。電動の削り機ではなく、フローニンゲンの街の中心部の文房具屋で購入したとても小さな削り機を用いて自らの手で色鉛筆を削った。鉛筆を削ったのは一体何年振りだろうか。削り機を回す感触と削り屑が出てくる音がとても懐かしかった。自分の手で道具の手入れをするとそれに対してとても愛着が湧く。今の私は、内的感覚をデッサンするためのこの色鉛筆になんとも言えない愛着を覚えている。

時刻は日曜日の午後七時半を迎えた。起床した早朝の六時と似た様な明るさを持っており、今が朝だと言われても外見上はわからないほどだ。早朝から今にかけて空はずっと薄い雲で覆われていた。そのせいもあってか、今日は一日を通して涼しかった。明日はさらに気温が低くなるようだ。

今日はこれから音楽理論に関する専門書とハーモニーに関する専門書を読み進めていく。現在作曲実践に関しては毎日行えており、それは大変良い習慣となっているため、理論的な学習も毎日の習慣にしたいと思う。確かにこれは以前から述べていたことではあるが、まだ完全な習慣になっていないことからも、無理をせず、毎日少しの量を学習していくことが肝要だろう。それらの学習を終えたら、就寝前には昨夜の続きとして、ヴァン・ゴッホ美術館で購入したDVDを鑑賞したい。

これはゴッホの生涯を辿るドキュメンタリーであり、ゴッホの人となり、そして絵画に対する思想を理解する上で非常に有益な内容だ。昨日DVDを見ていた時にも思ったが、ゴッホがつぶさに絵画の制作過程を手紙の形で弟に報告していたことは、ゴッホの絵画制作に対する思想と技術を育んでいく上でなくてはならなかったものだったと言える。

弟のテオに宛てた手紙では、逐一何をどのような意図を持って描いていたかを書き留めており、ゴッホは絶えず自己反省を手紙を書くという実践を通じて行っていた。絶え間ない自己反省と実践の往復。ゴッホはテオと手紙の往復をしていただけではなく、それを通じて絶えざる自己反省と実践を繰り返していたのである。ゴッホに倣い、落ち着いた馬車馬のように毎日書くことを通じた自己反省を行い、それと同時に、作曲を含めた諸々の実践活動に従事していく。それがいつか必ずや自分の思想と技術を目に見える形で大きく育むことにつながるだろう。フローニンゲン：2018/6/3（日）19:47

2650. 新たな歩み

今日は六時過ぎに起床し、六時半を少し過ぎてから一日の活動を開始した。今朝はアムステルダムから戻ってきて二日目の朝となる。昨日に引き続き、今日も空一面に雲がかかっている。そのせいもあってか、早朝のこの時間帯は肌寒く感じる。換気のために書斎の窓を開けていたが、先ほどそれを閉めた。今日の最高気温は19度とのことであり、明日も似たような気温になるようだ。

今日は午前中に音楽理論の専門書を読み進め、昼食前に一度作曲実践を行う。専門書を繰り返し読むことの意義を改めて実感している。昨日から読み返し始めた専門書は、音楽理論の基礎をわかりやすく、かつ網羅的に解説している。早朝にまずはこの書籍の続きに取り掛かる。

本書を読むことにどれだけの時間を充てるかは未定だが、もし時間があれば森有正先生の全集第14巻の続きを読むことや、過去の日記の編集に時間を充てたいと思う。そうしたことに時間を充てていると昼食前の作曲の時間になるだろう。昼食後にももう一度作曲実践を行う。どちらも共にモーツァルトに範を求めるか、昼食後の際にはバッハに範を求めようと思う。

作曲実践が落ち着いたところで仮眠を取り、仮眠後からは論文の加筆修正を行っていく。昨日と同様に、三時間ほど集中して執筆作業に取り掛かることができればと思う。昨日の執筆によって、文章を加筆修正する方法とリズムが掴めたように思うので、今日もそれに従う。今日の加筆修正によって、最終ドラフトの完成まであと一歩となるだろう。

明日はあえて論文の執筆から離れ、明後日にもう一度加筆修正を行う。明後日に最終ドラフトを完成させることができればと思う。バルトークが演奏活動を数年間控えたように、今後しばらくは科学研究を控えようと思う。それは論文を執筆するような科学研究を指す。もはやそうした研究に今後戻ってこないかもしれないが、それはそれで良しとする。

自分の人生が少しずつまた新たな方向に動いているのを感じる。科学研究から一旦離れ、今後そこに戻るにせよ、戻らないにせよ、新たな歩みを自分が進め始めたことは確かだ。また、科学研究に基づいた論文を書かないことは、文章を書かないことを意味しない。論文などよりずっと重要な日記は書き続ける。ここでもやはり、ゴッホを模範にするべきだろう。

ゴッホが手紙の形式で日記を綴り、さらには手紙の中で絵画制作に関する仮説と実証結果を記していったように、自分も日記を書き続ける。また、ゴッホが絶え間なく手紙を書いたことに加え、絵画を実際に描き続けていたことも見習わなければならない。自分にとっては、作曲を通じた表現活動が何よりも大切になる。日記と作曲だけに従事する生活の実現に向けて、今日もまた一歩前に歩みを進めていく。フローニンゲン：2018/6/4（月）07:44

No.1051: Like Water

I can notice that everyday and my life are flowing as if they were water. Thales' cosmology ──"The nature of all matter is water"──crosses my mind. Groningen, 08:10, Saturday, 7/7/2018

2651. クレラー・ミュラー美術館への再訪計画:オディロン・ルドンの特別企画

今日は早朝から相変わらず雲が空を覆っている。気温は低く、とても肌寒い。いつもの通り書斎に閉じこもり、本を読んだり文章を書いたりして過ごしている。

早朝に、オレンジ色の蒸気船に乗って海に揺られているような感覚がやってきた。それは幾分ふわふわとした感覚であり、小刻みな気分の揺れが幾分嬉々とした感情を引き起こす。その感情が少し落ち着いてきた時、オディロン・ルドンという画家について少し調べ始めた。すると偶然にも、冬が間近に迫った昨年の秋に訪れたクレラー・ミュラー美術館でルドンの特別企画が開催されていることを知った。

しかもちょうど一昨日からだ。一昨日から9/9までこの企画が開催されることを知り、再度クレラー・ミュラー美術館に足を運んでみたいという気持ちになった。この美術館は以前の日記で紹介したように、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園の中心に位置している。この国立公園はオッテローと呼ばれるとても静かな場所にあり、宿泊したホテルの朝晩の静けさが懐かしく思い出される。

クレラー・ミュラー美術館は、ちょうど数日前に訪れたアムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館に次いで、ゴッホの作品を数多く所蔵している。この美術館に所蔵されているゴッホの作品とルドンの特別企画を見に行くために七月の半ばあたりに、再度デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園近くに宿泊をし、クレラー・ミュラー美術館を訪問しようかと計画している。

ルドンに関心を持ち、このような機会が目の前に現れたことの意味を考えると、それを逃してしまうことはどうも惜しい。七月はどこかに旅行することを予定していなかったのだが、オッテルローに二泊三日の旅に出かけることにしたい。前回は秋が深まる時期のデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園を見ることができた。今回は夏の様子を伺い知ることができるだろう。

宿泊するホテルは前回と同じ場所にするか、異なる場所にするかは現在考えている最中である。いずれにせよ、国立公園近くの静寂さと自然を堪能することができるに違いない。今からそれが楽しみだ。

今日はこれから昼食までの時間を使って作曲実践を行う。午前中に音楽理論の専門書の二読目を終え、知識の拡充を図った。本日学習した項目がすぐに今日の作曲実践に反映されるとは限らないが、習得した知識は必ずや実践をより深いものにしてくれるだろう。

いつもと同じように、参考にする曲をまずは聴き、その曲に喚起される内的感覚を色鉛筆で楽譜上にデッサンしてから作曲実践を行う。聴覚的なものは視覚的なものへ、視覚的なものは聴覚的なものへと感覚を転換していく。今から作る曲がどのようなものになるかは当然ながら未知であり、未知であるがゆえに大きな楽しみがある。フローニンゲン:2018/6/4(月)11:24

No.1052: A Slope of Witches

Both black and white magic exist in this world, and in reality, all of us unknowingly utilize both in our daily life. If we think about it enough──or even if we don't think about it at all──that is common sense too much because witch-hunt is omnipresent in our society. Groningen, 08:25, Saturday, 7/7/2018

2652. 安住の地を求めて

時刻は夕方の七時半を迎えた。今この瞬間の外の様子は、昨日のこの時間帯の様子と瓜二つである。空全体に薄い雲が覆っており、そよ風が時折吹いている。どこか寂しげな雰囲気を発していて、気温も低い。小鳥のさえずりと目の前の通りを走る車の音が時折聞こえてくる。

ここ数日間、なぜだか私は今後の生活拠点、とりわけ永住の場所について考えを巡らせている。候補地は幾つかあれど、それらが本当に自分の永住地なのかが一向に分からない。それらの場所で暮らすことに幾分ためらいがあることを見ると、それらの土地は自分にとっての永住地ではないように思えてくる。「もうここが自分の安住の地だ」という場所がこの世界で一向に見つけられない。

地域はおろか、国さえも見つからない。どの国のどの場所に自分は最終的に落ち着くことになるのだろうか。そのようなことをここ最近よく考える。安住の地とするための条件が幾つかあることはすでに明らかになってきた。この点に関しては朗報である。だが、それらの条件をより精査し、そしてそれらの条件を満たす場所をこの世界から探し出していかなければならない。とにかくその場所を自分の目で確かめ、自分の足で歩くこと。それが大切であり、安住の地を見つけるという観点で今後は旅をしていく必要がある。

数年後をめどに世界を一周する船旅に出かけようと思っており、それは安住の地を見つけ出すためにあるのかもしれない。この世界にはすでに自分が生活できる場所がいくつもあることがわかった。ただし、まだ安住の地を見つけることができていない。

物質的に豊かな生活を求めるよりも、心の豊かな生活を求める。この点において現代社会の大衆は残念ながら賤民である。金があっても金がなくても賤民であるということの意味を考えなければならない。賤民から脱却するには目覚めが必要だ。現代社会は眠った賤民ばかりで溢れかえっている。

今日は仮眠後、論文の加筆修正の続きを行った。相変わらずのはかどり具合に満足している。今日をもってして、懸念事項であった先行研究の調査に関する文章の加筆修正が終わった。論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授からの助言を基に、“Literature Review”のセクションの記述を随分と分厚くした。

今日の加筆修正をもってして山場を越え、あとは明後日に他のセクションに対してもう少し加筆修正を行う。具体的には、“Discussion”のセクションの最後で今回の研究の限界について言及する際に、新たに発見した限界について書き留めておく。また、“Abstract”と同様に、250-350字ぐらいの“Conclusion”を書き足す。これによって、論文の締まりが良くなるだろう。

明後日にそれらの加筆修正を行い、明々後日に再度全体を読み返した後に、ツショル教授に最終ドラフトを送りたい。論文の完成が近づいてきていることを嬉しく思う。それは論文から手を離すということに対してだけではなく、その後に待っている自分の純粋な関心だけに基づいた旺盛な探究活動を開始できることに対して感じている喜びである。フローニンゲン：2018/6/4（月）19:47

No.1053: A Dance of the Ground

A dance of the ground is very strong, and at the same time, it is tender. Groningen, 08:27, Sunday, 7/8/2018

2653.「型」について

時刻は夜の九時を回った。ざわめくような風が吹き、街路樹の葉を小刻みに揺らしている。

なぜだかわからないが、とにかく何かを書いておきたい。何を書こうとしているのか分からないが、とにかく書く。馬車馬のように書く中で自己を落ち着かせる。地球が回るのと同速度で走れば止まっているように知覚されるのと同様に、自分の内側で何かが急速に運動を進めているのであれば、その速度と全く同じ速度で文章を書き留めておく。書くことなど何もないのだが、それでも書く。何かが出てくるまで書き続ける。そして何かが出てきたらそれを起点にしてまた書くのである。人生はそのようにして進む。

先ほど、ウォルター・ピストンが執筆したハーモニーに関する書籍“Harmony (1978)”を随分と読み進めた。本書は500ページを越す大著であり、中味も濃いい。本書を読み進める中で、この書籍がどれだけ今の自分にとっての肥やしになるかを考えていた。それは計り知れない。

ピストンは元々ハーバード大学で作曲理論を教えていたが、彼が実際に残した曲についてはほとんど知らない。よくよく考えてみると、私が現在参考にしている優れた作曲理論書の多くは、傑出した作曲理論家が執筆したものであって、生粋の作曲家が書いたものではないことに気づく。

バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの過去の偉大な作曲家は、作曲理論に関する体系立てた解説書を残していないように思う。私が無知なだけであり、もしかしたら彼らも何かそうした解説書を世に残しているのかもしれないが、今のところそうした書籍とは出会っていない。こうしたことからも、彼らは本当に作ることだけに専念した人間だったのだと思う。音楽の学位を持たず、またそれを取得する意思もない私が心配をする必要はないのだが、私が作曲を教える日などやってこないだろう。

全くそれは正しく、私はただ作り続けることさえできればそれでいいのだ。それが正直な思いであり、切実な願いである。とにかく作り続けること。誰にも見えないところで、誰にも見られずにただ単に曲を作り続けること。

一つ一つの小さな曲が数珠つなぎのように一つの巨大な形になっていくように曲を作り続けていくこと。それが一つの巨大な曲だったということが自分の人生を終えた後になって初めてわかるようにすること。それまでは一つ一つの部分を作っていく。その部分の中にフラクタルを具現化させ、一つの巨大なフラクタル構造の礎にしていくこと。

要諦はがむしゃらに作り続けていくということであり、そこに自己の全てを課していくことである。心身の状態を整えることは、創造活動に十分に打ち込むための不可欠なものとなった。とにかく心身を常に最善のものにしていく。心身の状態を崩すようなことは一切しない。もう作るためだけに生きる。

昨日、作曲実践を終えた後に、「型」と呼ばれるものについて考えていた。その主題に向かわせたのは、一昨日から視聴を始めたゴッホの生涯に関するドキュメンタリーだった。型を師から学ぶという発想を捨てようと思う。確かに今の私は、作曲に関して過去の偉大な作曲家に範を求めて曲を作っている。

しかし、彼らから型を学んでいるかというと、厳密にはそうではないように思えてきた。型すらも自分で作っているという明確な感覚が芽生え始めている。型を他者から自己の内側に流し込んでいくのではなく、型そのものを内側から作っていく。そして、ひとたび構築された型を絶え間ない実践を通じて練磨していき、次々と刷新していく。型は与えられるものではなかったのだ。型は自分で作るものだったのだ。

型を学ぼうとしていた自分は愚かだったのだ。型は学ぶものではなく、自らの手で作っていくものだったのだ。仮に出来合いの型を習得しようと思っても、実はそれは自分の内側から作り直される形で習得されるものなのだ。型など存在せず、型は自分から作り出していくものだという気づき。これがどれだけ自分に対して光を投げかけてくれただろうか。

今日もこれからゴッホに関するドキュメンタリーの続きを視聴してから就寝する。明日の朝からまた作曲理論の学習を進め、曲を作っていく。そして書きに書くということを行う。日々を生きるとは書く

ことであり、作ることである。日々は型と同じく、自ら創造していくものなのだ。フローニンゲン：2018/6/4（月）21:21

No.1054: In the Starry Morning

I feel as if I can see an infinite number of starts falling in the morning. This morning makes me feel so. Groningen, 10:06, Sunday, 7/8/2018

2654. 空という象徴

今日は早朝の六時に起床し、六時半から一日の活動を始めた。目覚めと共に心身の状態が優れていることに気づいた。いつものようにヨガを含めた身体運動を少し行った。ヨガの実践を起床直後に組み入れることによって、一日を開始させる心身の状態がより良好になったのみならず、その日一日の心身の状態にも少なからぬ影響を与えているように思う。

早朝にヨガを行うことは今後も継続させていき、どのアーサナをどのようにどれほど行うかについては色々と実験を重ねていきたい。身体運動を行ってからすぐに取り掛かったのは、内的感覚をデッサンすることであった。先ほど描いたデッサンは三種類の青色を用いた川のような絵であった。書斎の机を前にした時、すぐに川のイメージが現れた。

色も青以外に選択する余地はなく、自分の手が青の色鉛筆に向かい、そこから川が描かれた。デッサンを描いている最中は無心の状態が続き、「絵画瞑想」のような実践をしていたことが後々になってわかる。ヨガの実践と同様に、デッサンもなくてはならない実践となった。

昨日就寝前に、アムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館で購入したドキュメンタリーDVDを視聴した。ちょうどその中で、ゴッホが愛していたシンボルについての解説があった。それはヒマワリだった。ゴッホがヒマワリをこよなく愛して頻繁にそれを描いていたことは多くの人が知っていることだろう。「自分はヒマワリを描く画家だ」とゴッホ自身も述べているほどに、ヒマワリが象徴するものにゴッホは惹かれていたのだろう。

そこからしばらくヒマワリに関する解説を聞いていると、「自分にとって大切なシンボルは何だろうか？」という問いが立った。直感的に生まれたのは、海か空だった。それらは共に時間の経過と共に変化を見せる。人間が絶えず変化を経験しているのと同様に、海も空も常に千変万化する。

私はこの二つのシンボルに、どこか人間に近いものを感じる。自然に存在する数多くのものは時間の経過に応じて絶えず変化するが、海と空の表情の豊かさに対して私は特に惹かれているようだ。ゴッホがヒマワリを何度も描いたように、海や空を題材にした曲を作りたいという思いが湧き上がってくる。今は残念ながら海が近くにないが、空ならある。空ならどこにだってあるのだ。

空の遍満性。この世界にあまねく存在している空。この世界を包むようにして存在している空。空が持つ遍満性とある種の包容力のようなものに私は惹かれているのかもしれない。ここから少しずつ空を曲として表現するにはどうしたいいのかを考えていくことにしたい。

その空を見ているのは私であり、自分の思考や感覚の全てが空と一体になる形で表現されていく。そして、その空はこの世界の全てと繋がっている。全ての国や地域に住む人は同一の空を見ているのだ。空は各人固有に知覚されていながらも、それは一なるものである。ここに多者と一者の合一を見出せないだろうか。

薄い雲で覆われた空を数羽の鳥たちが羽ばたいていった。その後、おびただしい数の渡り鳥が空に姿を現し、隊列を組んで飛行している。その姿はどこか回遊魚のようである。空に描かれる絵画はいつも賑やかだ。変化に富み、それを見ていると飽きることを知らない。

空を通じて立ち現れる内外の変化を曲にしていくために、今日も鍛錬を積んでいきたいと思う。フローニンゲン：2018/6/5（火）07:02

2655. 使い込まれた書籍

ここ三日間に引き続き、今日もまた肌寒い。室内で半袖でいることは少々寒く、上に何か羽織るものが必要かもしれない。気温の低さと同様に、空の様子もここ三日間と似ている。今日もどうやら一日中曇りのようだ。

昨日に論文の加筆修正の山場を超えたため、今日は論文を寝かせることにして、論文を開くことはしないようにする。明日と明後日に再度論文の加筆修正を行えば、最終ドラフトが完成することになるだろう。すでに論文の規定の文字数に達しそうであり、何をどれだけ加筆するのか、あるいは余分な箇所をどのように削除するかということを考えていく必要がありそうだ。いずれにせよ、論文の加筆修正に目処が立ったことは嬉しいことである。

論文の提出を終えたら、欧州での三年目の生活が本格的に始まることになり、この一年間は旺盛な探究に従事し、旺盛に創造活動に励んでいくことになるだろう。学術的な探究は美学と意識の形而上学を起点にし、日記の執筆と作曲を毎日行っていく。何よりも優先されるべきは日記の執筆と作曲であり、それ以上に重要な仕事は今の自分にはない。それらの実践こそがライフワークと呼べるものであり、自分の人生をより深く豊かにしてくれるものだ。

今日はこれからウォルター・ピストンの“Harmony (1978)”の続きを読んでいく。昨日の夜にも本書に言及していたが、この書籍はやはり非常に優れている。500ページを越す大著だが、本書を何度も繰り返し読んでいく必要がある。学生時代に単語帳の全ての単語を全く苦もなく暗記したように、本書に掲載されている知識項目を全て実践に活用できる形で習得したいと思う。

そのためには繰り返し本書を読んでいくことが必要になり、読む際の工夫が大切になる。本書を読み進める中で何か思考が湧き上がってきたらそれを必ず書籍の中に書き込む。ノートにメモをするという愚行を犯すことなく、書籍の中に次々と書き込みをしていく。また、文面から何かしらのイメージが喚起されたら、それも書籍の中に描いておく。

文章やイメージの書き込みがない書籍は自分にとって何も響かなかったものであり、逆にそうした書き込みが豊富なものは自分の心を動かす書籍なのだと思う。その書籍から得るものが多ければ多いほど、書き込みの量は増えていき、その書籍は使い込まれていく。その書籍と真摯に対話をしたのであれば、その対話の跡が必ず書籍に残るはずである。学生時代に使い込んでいた単語帳をふと思い出す。

あれほどまでに読み込んだ書籍は、現在の書斎の本棚を見渡すかぎりそれほど多くない。いやほとんどないと言っていいかもしれない。一回しか読まれない書籍というには、一回だけある人に挨拶

をした程度に過ぎない。その人を知り、その人から何かを学ぼうと思うのであれば、何回もその人に会い、何度も話しかける必要がある。

それと同じことを書物に対しても行っていく。美学、意識の形而上学、音楽理論と作曲理論に関する優れた書籍を何度も繰り返し読んでいくことを行いたい。学生時代に使い込んだ単語帳のようなものが今の本棚にないのであれば、それは不勉強の証である。読み込まれてボロボロになった書籍がないというのは、いかに寂しいことだろうか。それは不勉強を恥ずべきだというよりも、自分の人生を深く生きようとしないことに対する寂しさの感情を生む。

書物を通じて、書物と共に人生をゆっくりと深めていくこと。今日もその実現に向けた貴重な一日となる。フローニンゲン:2018/6/5(火)07:24

2656.『新世界より』とトロムソでのオーロラ観察

時刻は午前九時を迎え、近所で行なわれている工事が今日も始まったようだ。時折機械が動く音が聞こえて来る。そういえば、昨日は工事の音が聞こえなかったから、昨日は休日だったのかと思ったが、昨日は月曜日だった。曜日の感覚はもはやほとんどなく、毎日書斎で自分の探究と創造活動に明け暮れる日々が続いている。これを今後はより徹底させていく。自然に囲まれた場所で人知れず暮らし、不必要な外部との接触を一切断ち切るような形でなされていく生活。その生活の実現に向けて一つ一つ人生が進行しているように感じる。

今日は本当に寒い。六月に入って数日が経ったというのに、この寒さはなんだろうか。涼しいというよりも寒かったので、室内でも長袖を着て、暖かい飲み物を飲みながら仕事に取りかかっている。

先ほどハーモニーに関する書籍を読んでいる時に、ふとドヴォルザークの『新世界より』という曲を思い出した。以前私は、この交響曲が収められたCDを友人から贈呈してもらったことがある。それは今から七年前に、私が日本を離れ、米国の大学院に留学する直前のことだった。そのCDに収められた『新世界より』を機内で聴きながら、サンフランシスコの街を眺めた時のことを今でも覚えている。

会社を辞め、未知の分野を探求しようと思って米国に降り立った時、まさに新世界に来たかのような感覚があった。あの時は本当にゼロからの出発だったように思う。

当時の記憶があれこれと蘇ってくる。最初に仲良くなった米国人の友人から“How are you doing?”という言葉を投げかけられた時、なんと答えていいのか真剣に考え、頭を悩ませていた時の記憶が懐かしく思い出された。近所のスーパーに行く際には、レジでのやり取りの表現を頭の中で事前に準備しておくような有様であった当時の自分。

あれから様々な経験を積み、欧米での生活も七年目を迎えた。この地で生活をすることは、今も新世界の中で生きているような感じがする。いや、この世界のどこで生活をしようとも、日々が新世界の中で生きることに違いないのだと思う。

日々の世界は新世界なのだという気づき。毎日が常に新たな出発であるように思える。七年の時を経て、私は再び大きな未知の世界に向かって歩み出しているように思う。七年歩んで再び振り出しに戻った感覚だ。だが、今度の振り出しは以前の振り出しとまるっきり異なる。七年間絶えず歩みを継続して辿り着いた振り出しは、七年前の振り出しとは質的に異なるのだ。ここからまた新たな振り出しに向けて新たな歩みを進めていく。そんな気概に満ちている。

今日の気温の低さが影響してか、ふと北欧について思いを馳せていた。昨年に引き続き、今年もまた北欧に訪れたいと思う。いま少しばかり笑みがこぼれてきたが、それは今生活しているフローニンゲンもほぼほぼ北欧ではないか、ということから生まれた笑みだった。今年の夏はスウェーデンとフィンランドを訪れる計画を立てていたが、それに加えて、冬にオーロラを見に再度北欧に足を運びたいと突然思った。

すぐにあれこれ調べてみると、ノルウェーのトロムソという場所がオーロラの観測スポットとして有名らしい。トロムソという街は、「北のパリ」と呼ばれているらしく、北極圏にある街としては栄えているらしい。

オーロラの幻想的な光景を夢想する。トロムソに行くとすれば、11月の末か12月の中旬あたりがいいかもしれない。ちょうどその辺りにはまだ何も旅行の計画を入れていなかった。その時期は日没が早く、下手をすると一日中陽が昇らない「極夜」を経験することになるかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

オーロラを見にトロムソを訪れたいという思いに突然囚われたのは何かの縁だろう。もう少しトロムソについて調べてみようと思う。随分と気が早いが、トロムソに行くことになれば、現地に到着してからオーロラツアーを申し込むようにしたい。天気予報のように毎日発信されるオーロラ予測を確認してからツアーに申し込み、オーロラを観察できる確率をできるだけ高めたいと思う。

現地の寒さと日照時間を考えると、当地ではほとんど何もすることがなさそうだが、五日から一週間ほど現地に滞在したいと思う。そんな突発的な旅行計画が浮上した。フローニンゲン：2018/6/5（火）09:10

2657. 初夏の黄昏時より

時刻は午後八時を迎えた。もうすっかり夏の日照時間となり、今はまだ日暮れ前の雰囲気を放っている。今日の早朝は雲が空を覆っていたが、昼前からすっかりと青空が広がった。今も青々とした空が広がっており、夕日が空を照らしている。明日と明後日も天気が良いようなので、どちらかの日にランニングに出かけようと思う。

今日は午前中にふと、夏空を散歩しているかのような感覚が内側に流れ込んできた。その時間帯はまだ曇っていたのだが、どこか自分が空の上を歩いているかのような感覚があった。しかもその空は夏の晴れ渡る空であった。なぜそのような感覚になったのかは定かではない。

今日は午後から夕方にかけて在日韓国人の友人と街の中心部のカフェで話をした。その友人は先日までメキシコに半年ほど留学をしており、メキシコの話を随分と聞かせてもらった。また彼女の研究主題でもある在日韓国人のアイデンティティに関する話を中心に、随分と色々なことを教えてもらった。卒業後は日本の会社で就職することが決まっており、来月にはフローニンゲンを出発するそうだ。

来月の初めにはささやかながらお別れ会を開催しようと思う。ちょうど別れ際に、彼女が今月末にローマとギリシャを訪れるそうなので、ぜひお別れ会の時に旅の話を聞かせてもらうように約束をした。ちょうど私も来年の一月中旬あたりにローマに行き、春にギリシャに行こうと思っていたため、旅の体験談を聞くことがとても楽しみだ。

午後の八時半に近づくこの雰囲気がなんとも言えない美しさを放っている。とても穏やかな風が吹いており、暮れ行く太陽の光が優しく街全体に降り注いでいる。特に、夕日が目の前の街路樹を照らしている姿は本当に綺麗だ。いつも私はこの時間帯になると、夕日で輝く街路樹を書斎の窓からぼんやりと眺める。

今日はこれからバルトークの曲に範を求めて一曲作る。作曲の実践を積めば積むほどに、作曲実践の喜びが増してくる。おそらく今の私は、一日に最大で二曲作るのが理想的だと言える。それ以上の曲を作ろうとすると、集中力が切れてしまい、非常に杜撰な実践となってしまう。それでは意味がない。

実践をするときには集中し、その実践から最大限の学びを得られるようにする必要がある。そう考えると、一日で作れる曲は今のところ二曲だ。仮に今後作曲の技術が高まり、自分の内的感覚を自由自在に即興的に曲として表現できるようになれば話は別である。理想の境地はまさにそうした状態にあり、できれば今このようにして日本語で日記を書いているように、自由自在に音楽言語を用いて内側のものを外側に形にしていく。

英語で内側の現象を記述するよりも不自由なく曲としてそれを表現できる日がいつかやってくるだろう。また、日本語と同等、あるいはそれ以上に自由自在に曲として内的感覚を表現できる日がやってくることを望む。フローニンゲン：2018/6/5（火）20:33

2658. 緩やかな時間の中で

──人間の魂は、自己を落ち着いて眺めうる時間の長さだけ、豊かになるのかもしれない──辻邦生

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎてから一日の活動を開始させた。ここ数日間と異なり、今朝は起床直後から晴れ間が広がっていた。ちょうど起床した時に、寝室の窓から鮮やかな赤色をした朝日を拝むことができた。今日は一日中快晴であり、気温も上がるようだ。明日も似たような天気とのことであるから、明日は近所のノーダープラントソン公園にランニングに出かけようと思う。

今この瞬間も小鳥たちの美しいさえずりが聞こえて来る。早朝のこの時間帯、そして就寝前の時間帯の小鳥の鳴き声は一番美しく聞こえる。今日は風もほとんどなく、今目の前の街路樹の葉が揺れ

たのは小鳥が休憩にやって来たからである。しばらくするとその小鳥は別の樹の枝に飛び移っていった。

欧州での二年目の生活が終わりに近づいている。一年目に引き続き、二年目も非常に充実した年だったように思う。緩やかな時間の流れの中で自己と向き合い、自分のライフワークを着実に前に進めてきた。三年目の生活も全く同様に、いや二年目以上に充実した形で日々を過ごしていく。

自己を冷静に眺めるための十分な時間を確保する。欧州での三年目の生活は、ほぼ毎月どこかに小旅行に出かける。その旅行はまさに、自己とゆっくり向き合うための時間を提供してくれるだろう。心が豊かな生活を送るためには、自己と向き合う時間が不可欠である。それを欠落させてはならない。

時間の流れの速い場所で生活をしないこと。それを昨夜改めて心に誓った。時間の流れが緩やかな場所で緩やかな内的時間を過ごしてく。内外の時間の進行を緩やかに保つことが人生の質を深めていくことにつながるに違いないという確信がある。今年に行う小旅行の旅先は、どれも時間の流れが緩やかな場所にする。もちろん、主要な都市に出かけていく場合もあるだろうが、そうした都市の中でもできるだけ時間の流れが早い場所を避ける。

今日は午前中にウォルター・ピストンの“Harmony (1978)”の続きを読み進めていく。現在二読目を行っている最中であり、昨日100ページほど読み進めた。今日もそれぐらいの分量を読み進めていきたい。自分が強く関心を持つ分野の専門書はとにかく繰り返し読む。記述されている内容が頭に、そして身体及び自己の存在の内側に定着するぐらいに繰り返し読み込んでいく。

反復が何よりも重要であり、とりわけ作曲理論に関するものであれば、反復によって徐々に構築された知識を実際の作曲実践で活用してみることが重要になる。これを怠らないようにする。

ピストンの書籍を読むことが一段落すれば、ここ数日間と同様に、昼食前と後に作曲実践をする。その時間帯に合計二曲作ることが今の生活リズムには合致している。午後に曲を作った後に仮眠をし、仮眠から目覚めた後は論文の加筆修正を行う。全てが緩やかに、そして着実に進行していく。
フローニンゲン：2018/6/6（水）06:48

2659. オーロラ観測クルーズへの乗船計画

今日の天気は本当に爽やかだ。雲一つない青空が広がっており、初夏の優しい風が吹き抜けていく。小鳥たちが早朝から今にかけてずっと小さな合唱を奏でている。小鳥のさえずりを聞きながら書斎で落ち着いて仕事に取り組むことができるのは至福である。

昨日にふとしたきっかけでハチミツを購入し、今朝からヨーグルトに入れて食べることにした。ハチミツの甘さが絶妙であり、ヨーグルトとの相性の良さに驚いた。朝のヨーグルトにハチミツを混ぜるというのは新たな食習慣になるだろう。何を飲み、何を食べると心身にどういった影響があるのかを検証する癖がついてからもう何年も経つ。その時々の生活拠点や自分の状態に合わせて食生活を絶えず刷新してきた。

季節が夏になったということもあり、ここ数日間からは一日に飲むホットコーヒーの量を一杯減らした。比較的小さなカップに午前に二杯、午後に二杯コーヒーを飲むようにし始めた。そうした小さな食生活の変化は心身に大きな影響を与えるだろう。何をどだけ飲み食いするかは私たちの心身を直接的に形成していく。

午前十時を迎えようとしているフローニンゲンの気温は涼しいが、今日は午後から気温が上がるようだ。午後からは半袖で過ごすことができるだろう。

今日はこれから辻邦生先生がパリに留学した際に書き留めた『パリの手記』第一巻の続きを読み進めていく。一巻の冒頭で記載されている横浜からパリへの30日間の船旅の様子を見るにつけ、いつか自分も船旅に出かけてみたいという思いが強まる。

今年の夏と冬に北欧に旅行に行く際には、どちらかに短い船旅を入れようかと考えている。おそらく冬に北欧に行く際は、街に滞在しても日照時間の短さと寒さのためもあり、それほど観光はできないであろうから、いっその事オーロラ観測クルーズに乗船し、船の上で過ごすのも良いのではないかと思い始めている。

北極圏に位置するノルウェーのトロムソはオーロラ観測に最適の観光地らしいが、街に滞在しているとどうしても街の明かりがオーロラ観測の邪魔をしてしまうことがあるようだ。そうしたことを考えると、

真っ暗な海の上の方がオーロラを観測しやすいのではないかと思った。実際に調べてみると、やはり海の上からの方がオーロラを観測しやすいらしい。そうしたことからも、11月中旬か12月の中旬に予定していた北欧旅行では、ぜひともオーロラ観測クルーズに乗船してみたいと思う。

確かに私は、文明の発達した都市を訪れ、人間が産み出した芸術作品が所蔵されている美術館を巡ることは好きなのだが、欧州での生活も二年目を迎える頃になると、ある都市に旅行に出かけ、毎日美術館を巡ることはどこか過食状態のように感じられるようになった。

これは非常に贅沢なことなのかもしれないが、美術館や博物館を巡るのはほどほどがちょうどよく、毎日どこかの美術館や博物館に訪れることは結局消化不良を起こす。美を単に消費するような態度は改められなければならず、美を未消化にする状態も避けなければならない。

そのような考えから、とりわけ欧州での二年目の生活が半ばに差し掛かる頃から、突如として自然に近い場所でくつろぐような旅を好み始める自分が芽生えた。今年の冬はぜひとも北欧の海の上でゆったりとした時間を過ごしたい。そこでオーロラを眺めることができたらどれほど幸せだろうか。
フローニンゲン：2018/6/6（水）09:57

2660. 芸術教育に関する探究

穏やかな風が引き続き吹いている。街路樹の葉が緩やかに風に揺られ、風の優しさを感じる。太陽の日差しもまだ強くなく、とても涼しく感じる。

書斎の窓を開け、空気の入れ替えをしていると、外の世界の様々な音が部屋の中に入ってくる。小鳥のさえずりや、遠くの方で行なわれている工事の音が聞こえて来る。そうした音に耳を傾けながら、氷の世界について空想をしていた。氷の世界で行われる透き通る瞑想に思いを馳せる。そうした空想が自分を氷の世界に導き、あたかもその場で瞑想をしているような感覚になった。

これから昼食までの時間を使って作曲実践を行いたいと思う。今日はまずショパンに範を求めたい作曲実践に取り掛かる前にふと、以前から関心を持ち始めた芸術教育に意識が向かった。芸術教育の意義について深く探究をしていきたいという思いが静かに込み上げて来る。

欧州での生活を通じて、突如として芸術教育の重要性に目を開かされた。芸術教育の重要さについて今の私は言葉で説明することはできない。感覚的かつ直感的にそれが極めて重要であるということに気づいたという段階だ。今はまだ気づきの段階なのだ。この気づきを育てていく必要がある。そして、芸術教育の重要性及びその意義を自らの言葉で説明できるようにしていく。

この二年間だけでも随分と欧州の様々な美術館に足を運んだ。いつも微笑ましく、かつ意義深く思うのは、美術の専門家が子供達に作品鑑賞を通じた芸術教育を施している光景を目にする時だ。日本の美術館でもこのようなことを行っている場所はあるのだろうが、これまであまり気にかけたことはなかったし、そうした光景をそれほど目撃したこともなかった。芸術作品の鑑賞は、究極的には「没頭的に単に眺める」ということにあるのかもしれないが、その段階に行くためには鑑賞の感覚と技術を磨いていく必要がある。

それには当然ながら鑑賞の観点が必要となり、美術の専門家が子供達と対話をしながら鑑賞の観点を伝えていくことは大切に思う。そうした対話を通じて、子供達は少しずつ独自の観点を育んでいき、それが一人一人の子ども達の独自の感性を育んでいく。そこからさらに鑑賞体験を積んでいくことによって、芸術作品と自己が一体となるような究極的な鑑賞体験に至っていくのだろう。

芸術教育は子供にとって大切なだけではなく、むしろ現代の成人においても非常に重要であるように思う。感性が画一化され、感性が蝕まれていくこのような現代社会において、芸術作品を鑑賞することや芸術作品を自ら生み出していくことの意義は計り知れないように思う。その意義はもう自分がよく知っている。直感的にそれに気づいているのだ。だが、それを説明するに足る知識を持たない。

この点において芸術教育に関して本格的な探究をしたいと強く思うようになっている。今年一年間はどの学術機関にも属さないが、来年はまた芸術教育の探究に打ち込めるような学術機関に所属するかもしれない。その探究は決して科学的に行うのではなく、哲学的・思想的に行っていく。この夏から少しずつ芸術教育についての探究を進めていくのと同時に、そうした探究を本格的に行える学術機関を探していこうと思う。

新たな道が今目の前に開かれつつあるのを感じている。フローニンゲン：2018/6/6（水）11:35